

2024年12月8日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教18「真実に出会う」

詩編84：1～8、ヨハネ4：16～22

イエスさまは、突然「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」（16節）と言われます。このイエスさまの言葉は、これまでの水をめぐる対話とは何のつながりもありません。なぜ急に彼女の夫の話になるのか。それは、ここに女性の抱えている問題の本質があるからです。イエスさまはそれを見抜いておられます。この対話のままであれば（らち）が明かれないと思われたのでしょうか。確かに女性はイエスさまをからかって、まともに話を聞こうとしていません。イエスさまは、あえて問題の核心、彼女が触れてほしくない、その内面を明らかにされます。ここから形勢は逆転します。

イエスさまの問いかけに対して、女性は一言「わたしには夫はいません」と答えます。急に言葉数が少なくなります。事の本質を突かれた途端、口ごもるのです。真実を見抜かれた彼女の動揺がここに観て取れます。かつての夫の存在を否定し、真実を押し隠す。おそらく女性はこれまでそのように真実に蓋をして、ごまかして生きて来たのでしょうか。けれどもイエスさまの前では、神さまの前ではごまかすことができないのです。

そこに御言葉の役割があります。神さまの言葉は、人間の本質、隠れた罪を明らかにします。ヘブライ人への手紙の御言葉を思い起こします。「神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです。更に、神の御前では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです。この神に対して、わたしたちは自分のことを申し述べねばなりません」（4：12～13）でもそれはわたしたちの隠れた罪をあばき出し、これを裁くためなのでしょう。

そうではありません。神さまは、わたしたちと場当たりの、当たり障りのない、表面的な関係を作ろうとされているのではありません。すべてをご存知の上で、その上でわたしたちと出会おうとしておられます。それが愛するということではないでしょうか。相手の表面的な部分だけを見て、良いところだけを愛する、それは愛ではありません。その見えないところも、負の部分、闇の部分も、すべてを含めて愛するのです。その上で相手を受け入れ、承認するのです。それが出会うことであり、誰かを愛することです。

イエスさまは、この女性が蓋をしてきた罪と向き合っておられます。その罪のゆえに魂に渇きを覚えていました。それは自分でも気づかない魂の渇きでした。五人の夫と結婚を繰り返しても癒されない、ヤコブの井戸から水を汲み続けても癒されない。その渇きとイエスさまは向き合ってください。その渇きとは何でしょうか。それは愛せないということではないでしょうか。女性は「わたしには夫はいません」と答えています。夫がいたのに。これは法的な婚姻関係としての夫がいないという事実ではなく、実はまだ自分は夫と真実に出会っていない、夫を本当に愛していないということなのではないか。五回も結婚を繰り返しても真実に夫に出会えない、夫を愛せない。その罪を告白しているのです。もし女性がこのままであれば、これからどんなに結婚を繰り返しても、真実に夫と出会うことはできない、夫を愛することができないでしょう。それが「夫はいません」という彼女の言葉の背後にある人間の本質です。

わたしたちは、その人の存在そのものを愛しているでしょうか。むしろその人の持っている何かを愛しているのではないか。その人の付属品です。何かができるとか、何かが優れているから愛する。あるいはその人が自分にとって都合がいいから、プラスになるから愛するということがある。それでは、すべてを失ったところで、いやむしろマイナスでしかないところで、その人を本当に愛せるか。誰かを愛する、誰かと出会うとは、そういうことなのです。その人の持っている何かを愛することの根拠になるのではなくて、その人そのもの、その存在のままを愛し、受け入れること。でもそれができない。そこにわたしたちの限界、愛の破れがあります。それをこの女性は、「夫はいません」という言葉によって表しています。

イエスさまはこの女性と真実に出会おうとしておられます。良いところも悪いところもすべてを受け入れて、その上で向き合ってください。それが神さまのわたしたちとの向き合い方です。そしてその出会いが、より深いところでわたしたちの生き方を決定的に変えることとなります。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています」（19～20節）女性は図らずもここで礼拝の場所の問題をあげています。それはそのように人を愛せない原因がどこにあるのか。そのことをイエスさまがこの女性から自ら引き出させたと読むこともできます。

ここでイエスさまは「あなたがたは知らないものを礼拝している」（22節）とサマリア人の礼拝の問題を指摘しています。知らないものを拝んでいる。このところを読んで、使徒言行録の17章にあるパウロがアテネで伝道した時の話を思い出しました。アテネはそれこそ、ギリシア神話の神々が祭られて、至るところに祭壇がありました。あるところには「知られざる神に」と刻まれている祭壇さえ見つけたと記されています（使徒言行録17：23）。それがどういう神なのか知らずに拝んでいる。相手を知らないのです。出会っていないのです。

サマリアもアッシリアの宗教が入り込みました。列王記下17章24節以下には、アッシリアの王によって、アッシリアの五つの町からそれぞれの神々が持ち込まれたことが記されています。それぞれ知らないものを拝んでいる現実がそこにあったのです。この知らないものを神として拝むサマリアの状況と、五人の夫を愛せない、真実に出会っていないこの女性の姿は重なるところがあるのではないのでしょうか。

突き詰めて言えば、すべて礼拝の問題なのです。神さまを愛し、信頼して礼拝する時に、わたしたちは隣人を愛し信頼します。神さまと真実に出会えば、わたしたちも人とも真実に出会うのです。相手を知らずに、当たり障りのない関係で済ますのではない。神さまはわたしたちと真実に出会ってください。それが独り子イエスさまを世にお遣わしになられるクリスマス の出来事に表されました。そして人類の罪を全部その身にお引き受けくださり、十字架で死んでくださいました。よみがえりによって、神さまを愛し、人を愛する新しい命を与えてくださいました。神さまはわたしたちを愛しておられます。すべてを受け入れ、すべてを赦してくださいました。だからこそ、わたしたちもそのように生きるのです。

天の父よ。あなたは愛に破れたわたしたちが真実に人と出会い、人を愛することができるように大切なイエスさまをくださいました。そのようにしてわたしたちと真実に出会い、愛してください幸いを覚えます。どうぞそのようにわたしたちも生きることができるよう。主の御名によって祈ります。アーメン。